草木国土みなほとけ

辻　憲男（文学部教授）

“盆と正月”という言葉があるが、昔は一年に二度、祖先の精霊を祭る習わしであった。大みそかのほうは『徒然草』のころにすたれた。お盆には盆棚に食べ物を供え、その前でにぎやかに踊って祖霊を迎えた。

その盆踊りの始まりは中世の念仏踊りだという。時宗の祖・一遍上人（いっぺんしょうにん）は南無阿弥陀仏の紙のお札を配り歩き、つぎつぎに不思議や奇跡をあらわしたので、信州佐久で民衆が歓喜のあまり踊りくるった。早くに家を捨て、寺に住まず、ボロ衣をまとい、晩年は弟子も連れずに、全国を遊行（ゆぎょう）した。時衆とよばれる信者たちがついて歩いた。1289年8月、病気になって、淡路島から兵庫津に着いた。持ち歩いた聖教類をすべて焼き捨てた。最期は加古川野口の教信のように、一切を捨てて極楽往生することを願った。教信は平安初期の念仏聖で、起きている間は常に念仏を唱え、死後の体は犬やカラスに食わせたという沙弥（しゃみ）、つまり在俗の出家者。真宗の開祖・親鸞上人もこの聖にあこがれた。

能を大成した観阿弥・世阿弥は時衆の徒だったという説がある。信光作の謡曲「遊行柳」は、一遍上人が奥州白河の関で朽ち柳の精霊に回向（えこう）し、「草木国土悉皆成仏」の功徳をあらわすという複式夢幻能。いま兵庫区の真光寺の祖廟わきに、1774年銘の石碑が災禍にめげず健在である＝写真左。

文中の出典は一遍聖絵（いっぺんひじりえ）、一遍上人語録、今昔物語集。